

ITエンジニアを配置 内製開発で生産性向上

建設DX推進の専門部署

クロスステイ ホールディングス

住宅設備全般の設計施工を手掛けるクロスステイホールディングス(本社・札幌)は、建設DXの一環でITエンジニアが所属する専門部署を社内にて設けている。ITコンサルタントとして社員から課題を聞き、必要に応じてアプリやシステムを内製開発し、生産性を向上させる。グループ企業8社の各種データを集め、経営判断に役立てるデータドリブンも実践する。アプリの外販も構想していて、DX化が遅れている業界全体の底上げを目標に掲げる。

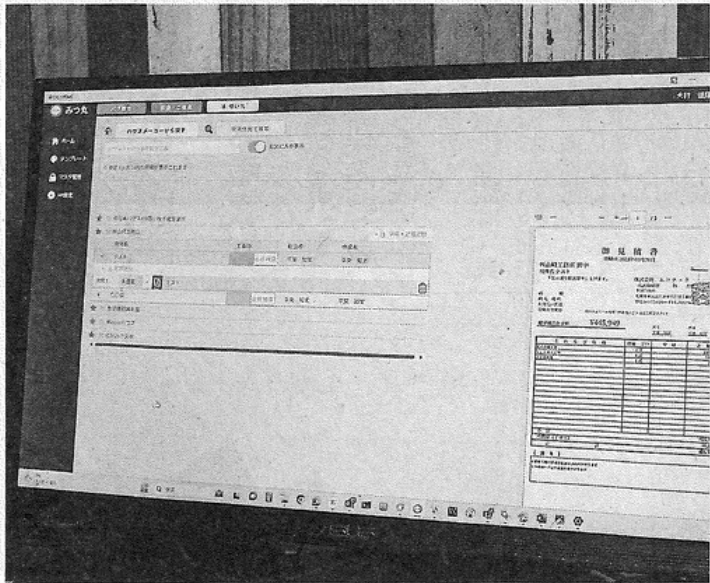
外販で業界全体底上げへ



情報システム部内の様子。20代の社員が多い

クロスステイHDは電気・空調のエコテック、住宅設備メンテナンスのアルティ、給排水設備の水研工業、総合提案営業のエコライフシステム、不動産売買・仲介のコネクト、建設業のブリッジ、人材育成のカイセイ、内外装のアスペックコーポレーションで構成。2021年度にホールディングス化し、住宅設備全般の設計・施工、メンテナンスをワンストップで担う。

20年からITを用いた業務改善を目的とする情報システム部を設置し、5人が所属。20代の社員が多い。同部の遠藤大輔次長が住宅業界での経験



を持つ。林秀樹社長は「住宅設備業界はアナログ体質で、社長就任当初(19年)のエコテックもDXに乗

り遅れていた」と振り返る。同時に建設DXの推

進が他社との差別化につながり、人材獲得の鍵になるとらんだ。

遠藤次長は、IT人材が社内にいる強みを「改善点を探るコンサルタントの役割とデジタルを苦手とする人とITをつなぐ翻訳者の役割が担える」と分析。現場の要求水準を見極め、外注だけでなくアプリの内製開発も選択できるため、運用から改善のサイクルが早い。

実際を見ると、請求書見積書の高精度化を目指した新システム

をデータ化するアプリでは月間200分の作業時間を半分まで省力化。義務化されたアルコールチェックの内製開発は、極力簡素にして現場が求める使いやすさを重視した。開発で重視するのは「ちよどどよ」だ。

担い手不足が深刻な中、IT人材は求人市場の中でも貴重な存在だが、今いるメンバーの多くは友人同士の紹介や口コミで集まった。林社長、遠藤次長ともに人材確保への共通の理念として「仕事内容に共感してもらうこと、同社に入ってみたいと思わせること」がある。

林社長は「建設技術者、IT技術者ともに共通で、会社の価値と文化・ビジョンを知ってもらうことが重要。その人が持つ技術や知識は「二の次」と言及。遠藤次長は「IT系の他社より条件は良くないが、ITエンジニアとして幅広くチャレンジできる環境が魅力」と説明する。

一方、建設DXを推進する中で「1社だけ頑張っても効率化には限界がある(林社長)」という現実も見えてきた。そこで内製開発してきたアプリの外販を計画し、業界全体のDX化に寄与することを次の目標とした。林社長は「当社がそうだったようにアプリ自体よりもコンサルや翻訳者の役割を重視したい。住宅設備会社だからこそ他のIT企業より柔軟に対応できる」と自信を見せる。